入試の成績と入学後の成績

各大学・学部等における入学者の選抜が公正かつ妥当な方法で行われたか否かを検証するためには，入学者の学内成績や学習状況，とくにこれらと高校調査書の内容や入試の成績との相関等の調査研究が必要であり，昭和57年度には7割を超える大学等において研究が行われている。なお，これらの研究成果を昭和60年度以降の入試決定の検討資料として活用している大学が多いことは注目に値する。

調査研究の方法については，精度を高めるため，単位数を加重した学内成績や卒業単位数の大半が必修科目である学部・学科等に限って集計処理する大学が増え，また，相関係数以外に重相関分析，数量化理論Ⅰ・Ⅱ，多次元尺度構成法等の分析法を導入した大学もあり，改善の跡がうかがわれる。

高校調査書の内容や入試の成績と入学後の学内成績の相関については，入試の成績よりも高校成績の方が，一般に学内成績との相関が高く，一般教育科目，専門教育科目単独よりも両者の総合成績の方が，一般に高校成績との相関が高く，これらの傾向は現役に著しい。また，共通1次試験の成績と一般教育科目の成績との相関や第2次試験の成績と専門教育科目の成績との相関が高いとする大学もある。このほか，面接検査中の「観察力テスト」の成績と一般教育科目の成績との相関，高校調査書の「行動及び性格の記録」の内容と学内成績との相関（受験者を全人的に評価する），推薦入学者と一般入学者や大学院進学者または医師・薬剤士国家試験合格者と同不合格者の入試の成績と学内成績との相関等も比較的多くの大学で追跡されている。

推薦入学者や職業高校・高専出身の入学者の学内成績は，一般入学者よりも学内成績が勝っており，留年率が低く，就職率が高いという結果を得ている大学が多い。

学習状況については，留年者は，高校調査書の成績概評がCの者がとくに多く（大学によっては約50％），Aは極めて少ないことや共通1次試験成績下位群，2浪以上の入学者等に多いことが知られている。また，共通1次試験・第2次試験の配点比率と留年率との関係や志望順位と留年率との関係，共通1次試験成績・第2次試験成績（総合点）の相関図に基づく留年者の発生状況などを調査している大学もある。